

おもえるが、紙幅のゆとりがない。さいごに、私の読みの浅さから、見当ちがいの評言を小林氏にくわえることがあったのではな

いかとおそれている。あらためて、御教示をおねがいしたい。

(東京女子大学)

意見 2

小林論文「青年期をどうとらえるか」を読んで

藤 原 喜 悦

青年期を、教育社会学の立場からいかにとらえるべきかという問題に、ま正面から取組んだ小林文人氏の論文を読んで、隣接科学(心理学)を専攻する筆者にとっては、啓発されるところがき

学の見地から、いくつか気づいた問題について論じることとはできそうなので、敢えて筆をとることにした。

わめて多かった。特に、教育社会学においては、単なる青年の意識調査や行動研究はそのまま教育社会学的研究にはならないことを指摘し、年序組織のなかでの青年集団の教育や訓練の機能、成人の価値期待とその内面化の問題、そこにおける社会化のパターンなどが、中心の関心事でなければならないと力説されておられることは、小林氏がなみなみなぬ情熱をもって、教育社会学の課題意識を明確化されようとしていることを示すものであり、青年心理学の研究にたずさわる人々にとっても大いに範となすべきであることが痛感される。

さて、筆者は教育社会学における従来の研究がいかなるものであるかについては、ほとんど知識をもちあわせていないので、小林論文をほんとうのいみでは批判する資格がない。しかしながら、心理学的立場、とくに同じく青年を研究対象とする青年心理

学的研究、(3)青少年問題の観点からのもの、の三つに大別している。ここで筆者にとり興味深いことは、教育社会学においては、フォーマルな青年教育の問題としては、勤労青少年をさすのがふつうであり、いわゆる正規の学校教育体系を上昇していく生徒・学生の集団はふくまれていないという指摘である。これは、わが国の青年心理学的研究においては、その大部分が生徒・学生に関する研究であり、勤労青少年の研究が比較的なおざりにされて来たことに較べると、きわめて対照的な特色であるといえよう。小林氏は、このような特色を教育社会学的研究の巾のせまさを示すものであると反省しているが、筆者はむしろ、わが国における教育社会学の研究者たちの強い意欲を示すものではなからうかと考

える。すなわち、アメリカにおける Youth Culture の実証的

研究が主として生徒や学生集団にたいしておこなわれていることにいたずらに追従せず、わが国の青年教育体系の複線の性格をじゅうぶん認識して、主体的に研究を進めて来たからであり、今後研究が進展するにつれ、しだいに生徒・学生をも研究の対象にとり入れるようになるであろうと考えられる。

なお、青年心理学においても、近年勤労青年に関する研究がしだに行なわれるようになり、教育社会学的研究の動向と反対の傾向を示している。いずれも研究成果がしだいにゆたかなみのりをあげて来たことを示すものといえよう。

(二) 青年期を過渡期としてとらえること、青年期が社会的文化的条件によって規定されることについては、だれしも異議を申立てないのであるが、その際いかなるメルクマールをとりあげるかということについては、かなり問題があることは否定できない。

小林氏が教育社会学の立場から、青年集団に着目して、「集団規制をうけることによって、さらに実質的に当該社会の『青年』であることを確定される。またかかる青年集団から離陸すること、青年が成人たる資格を実質的に獲得することにつながる」と述べていることは、筆者にとってきわめて興味深いことである。しかしながら、ここである、実質的に当該社会の青年であることを確定されるということは、一体どういうことなのであるか。その後に述べられている若者組の例のごとく、それにメンバーとしてくみ入れられることが、はたして「実質的」ということになるであろうか。心理学的観点からいえば、35才や42才になっても若者組の構成メンバーに包みこまれている人間が、たとえば

生活の中で青年の地位と役割しか与えられていなくとも、それだけで実質的に当該社会の青年であることを確定されているとはいえない。むしろその人間は、形式的に青年集団にくみこまれているにすぎず、したがって青年期と本質的に関連をもたないといえよう。すなわち、彼は心理的には青年集団に所属しておらず、実質的には青年として行動していないかも知れない。心理学的見地からいうと、正にこのようなかわりあいこそ、青年にとって重要なみを持つものであり、小林氏の指摘することの意義もじゅうぶん了解できるが、さらに筆者の指摘する点にも、教育社会学者が眼を向けて、真に生き生きとした人間のあり方を的確に把握してもらいたい。

小林氏は、ムラの若者組の構成メンバーについてのべた後で、同様な例として、政治学習と生産学習の結合の学習運動の担い手としての青年OBの例をあげているが、このような積極的な青年集団への参加こそが、彼らの存在をして真に青年期的なものにしているのである。筆者の理解するところでは、小林論文においては、ムラの若者組と「青年OB」グループとは一応性格を異にするといいたが、青年集団への所属という客観的事実の例として両者があげられており、この点に関して両者は明確に区分されていないようである。しかしながら、筆者によれば、青年集団への所属という点に関して、前者は形式的受動的であり、後者は実質的能動的であるところに、本質的な差異があると考えられ、このような点に特別な配慮をなすべきであるといえよう。

(三) 青年期をとりあげるばあい、社会階層の要因が重要である

という小林氏の指摘は、まことに適切であり、青年心理学においてもこのような観点がとり入れられて、しだいに実証的な研究が行なわれつつある。

しかしながら、青年心理学の立場からいうと、さらにまた、個々の青年が生育して来た家庭環境や現在直面している生活環境が異なる独自のパターンを有しているか（一つの文化社会さらにまた特定の社会階層などに共通な文化的社会的条件に対比して）ということもきわめて重要であるといえよう。たとえば同一の社会階層に属していても、異なった家庭に育つ青年は、その青年期の送り方にいちじるしい差異を示すばかりが少なくない。

もちろん、社会学や教育社会学では、一つの文化社会、一つの社会階層に支配的な青年のあり方を中心課題としてとりあげるのであるが、青年とういきわめて個性的なあり方を追求する青年心理学においては、そのようなレベルでの課題の解決にとどまらず、そこから脱逸した青年のあり方の形成過程をも科学的に解明しようという、強い意欲が存在するのである。このような一つの具体的な展開として、いわゆるQ・技法による青年のパーソナリティの研究があげられよう。たとえば、異なった文化社会や社会階層に所属する青年に対して、自己概念、生活意識、社会態度などに関してQ分類を行なわれしめ、その相関マトリックスを因子分析することにより共通因子を求めて、一つの文化社会や社会階層に特有な因子を抽出するとともに、他方、個々人に固有な独自因子の本質を解明することが可能となる。このような操作的な研究法は、教育社会学の研究領域においても今後大いに活用されるこ

とが肝要であると考えられる。

四 世代論に関する小林氏の指摘は、きわめて適切であり、筆者も全く同感である。しかしながら青年心理学においては、幼児期や青年期がいかなる歴史的社会的状況において迎えられるかによつて、青年期のあり方、その人格形成に重大な影響があることは、まだじゅうぶんには認識されていないようである。筆者の私見によれば、小林氏が教育社会学における分析的把握の欠如を指摘しているのとは対照的に、青年心理学では青年期の把握にこのような巨視的な観点が欠けているように思われる。

青年心理学におけるこのような実態は、今後の青年期研究にはじゅうぶん反省され、また克服されなければならないであろう。青年心理学的研究において、ともすれば陥りやすい危険性は、一つは安易な文学的青年解釈であり、他の一つは、盲目的な操作主義的青年測定であると思われる。このような誤りは、実は正しい社会科学的な観点、換言すれば歴史的社会的状況に対する適切な巨視的な観点が、青年心理学研究に採用され生かされていないかったことから生じたものであると考えられる。

小林氏の指摘するような、巨視的な展望に支えられた、適切な微視的分析的把握が、青年心理学的アプローチにおいても必要であるが、それは今後青年社会心理学の発展において実現されるであろうと筆者は期待している。

五 青年集団の類型について小林氏の提示している分類は、その原理が必らずしもすっきりしていないように見える。しかしながら、現在の青年研究においては、複雑な社会条件のもとに発生